

■ 猫 (五卷)

帝キネ 小阪映畫

原作脚色者 松屋 春翠氏  
監督者 長尾 史縁氏  
撮影者 高橋 武則氏

忠僕三平 主要役割 木村 猛氏

お秀の方 津守 玉枝嬢  
浅沼權之進 中村 翫曉氏  
城主松平忠彦 尾上 紋彌氏  
城代板倉左膳 尾上 紋一郎氏  
志賀大隅 嵐 笑三氏  
志賀織之助 市川 百々之助氏  
齊藤頼母 實川 延松氏  
娘 早苗 椿 惠美子嬢

〔略筋〕彦根の城主松平忠彦が病の爲め領政を任ぜられた城代板倉左膳は側女お秀の方と心を合はせ悪政をなし私腹を肥して居た町奉行浅沼權之進も板倉を背景として暴政をなし其民や婦女子を苦しめた。その時突如猫頭の怪人現はれ悪人共に及向つた。或る時城主の寢室に曲者が忍び込み殿を刺さるゝ時、猫頭の怪人は又現れ曲者を刺さつた。―が反つて曲者に傷けられ倒れた。急報に依つて馳つけ板倉がその「猫」の覆面を取ればそれは意外にも忠臣志賀大隅であつた。板倉は直ちに大隅を刺した。「猫」を打ち取つた悪人共は益々跋扈を逞にしたが「猫」の怪人は又も現れ遂に奇計を以つて板倉の悪計を破り、板倉は己れの盛つた毒酒に依つて亡びた。彦根城下が再び平和と幸福に返つた時、猫の怪人は又も現れ齊藤の娘早苗を奪つて何處に去つた。數刻の後静かな池畔に大隅の一千織之助は奪はれた筈の早苗と楽しい戀の語ひを續けて居た。そして忠僕三平も心好けた二人の幸福をながめて微笑んで居た。

マキノの「怪傑鷹」同様外國の連續映畫によく現れる様な怪人物の出現に依つて興味を呼び得る映畫である。然し見て譯もなく面白い事は確かである。松屋春翠氏の脚色はこうした譯りに必要な常套手段はあらいざらへ使つてだれに必要ないが別に獨創的な所は見當らない。ラストで板倉が悪計暴露してお秀の方を刺して毒酒を呑む作りは大芝居ではあるが時代ものとして長乗な手段で、充分緊張味を出し得て居る。長尾史縁氏の監督は益々手馴れを見せ、マキノと帝キネの長所を巧みに取り交ぜ、様な映畫を作り出して居る。映畫界には初御目見得の木村猛氏の忠僕三平は全篇大活躍、なして居るが覆面をかぶり通しなご紹介がラストなので観客の注意をひかないのは氣の毒であつた。尾上紋十郎の板倉は珍らしく敵役であるが堂々たる貫目



があつた事はさすがである。總觀して興味本位の愉快な映畫である只恐れ入るのはユ社の「ライオンマン」に似た猫の覆面である、ましてやその覆面の怪人が忠臣であるに至つては―  
(九月二十七日 大阪芦原劇場封切)  
―山本 綠葉―